

仮面ライダービルド×五等分の花嫁～五等分のベストマッチ～

しよくんだよ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

5年前。突如現れた巨大な壁

「スカイウォール」。

日本は東都、西都、北都の3つの国へと

別れ、対立してしまう。

5年後、高校1年生の風太郎は、成績優秀だが生家が借金を抱えており、貧乏生活を送っていた。ある日、風太郎は中野五月と桐生戦兔という転校生と知り合い、五月からは勉強を教えるよう乞われる。

そして人々を脅かす謎の生命体『スマツシユ』。

ピンチに駆けつけたのは二色の色をした

兎？戦車？の、2つの力を兼ね備えた

仮面ライダーだった！

物語は五等分によって始動する！

目次

一章 〱東都編〱

第1話記憶のファーストデイ	1
第2話過去と今のミッション	18
第3話実験と戦国ランナウェイ	39

一章 く東都編く

第1話記憶のファーストデイ

――夢を見ていた

火星有人探索という目標を胸に日本でロケットが発射された。

無事火星へと着陸し探索に行った宇宙飛行士が火星に住んでいたと思われる文明が進んでいた

遺跡を発見する。

遺跡は今にも崩れてしまいそうな程劣化が進んでいるが

宇宙飛行士は迷わず中へと入り、一部屋分はある

広い空間へと足を運ぶ。

瓦礫と砂埃だらけの空間、その中央部には

石の卓の様な物が設置されている。

：否、宇宙飛行士が目に入ったのはソレではない。

石卓の上に置いてある物だ。

建物や物は歪みが走っており、今にも崩れそうな状態であるのに関わらず、

その四角い物は砂埃は被っているが形や原型など変わらないまま、

石卓に置かれている。

勿論宇宙飛行士は興味を示す。

いや、寧ろそれにしか目がいかなかったのだろう。

周りなど気にもせず宇宙飛行士は歩み寄り

両手を差し伸べた。

そして、触れ、持ち上げた瞬間、物は光りひび割れ

覆っていた側の石が砕け落ちる。

光り輝くと火星で作られたのか造形が施されてる箱型の形をした物体へと姿を変えた。

いつ、誰が、何の目的のために作り出したものなのか、その一切が謎に包まれている謎の物体。

勿論、これは貴重な発見だ。宇宙飛行士は物体を

その他、辺りなど確認せず、躊躇なく
その場から持ち去り自ら乗ってきた宇宙船へと
乗り込み火星から離れ、地球へと帰還した。

これが、全ての始まりであった。

時は数年後、

東京、そこは、かつて盛んだった東京ではなく

隕石が落下、いや、戦争が起きたのか建物は崩れ

車や家は崩壊、人は逃げ惑う無惨で残酷な世界が広がっていた。

その中心には建物があつた。

正確には日本の文明では見たことのない巨大な塔。

塔の頂上には黒く、悍しく、恐しいとも言える巨大な渦が常に辺りを
を呑み込もうと廻っている。

宇宙の一説によるブラックホール。

なぜ、日本の東京に塔があり、その頂上には
ブラックホールがあるのか、分からない。

もはや絶望視するしかない光景が只々広がっていた。

だが、そこにはほんの一欠片の希望も見えていた。

塔の下、塔から地上に逃げ惑う人の中に4人、

塔へと歩いて行く人物がいた。

一人一人の腰には奇妙なベルトが装着されており、

この絶望を希望へと変えてくれそうな勇姿で、

塔へと歩いて行く、

人々は彼らをこう呼ぶ

“仮面ライダー”と%&かブーツ@gr!ー!ーツ!

☆☆☆

ここはとあるマンションの空き部屋。

秘密基地に見立てた様な模様替えがされており

ガレージ風の壁の作りに2階と1階に分けられた場所。

2階の小部屋は1階を見渡せる吹き抜け式の部屋で

作業机には工具などが散らかっていた。

その卓にはトースター機、コーヒー、鏡など

生活用品がいくつかが転がっておりこの机で大抵は

過ごしているのだろう。

そこから螺旋状の階段を降りた先には

小部屋とは打って変わり

空間が広がっている大部屋へとなっている。

鉄骨や鉄筋をベースに作られた部屋で普段では

決して見ることものない様な造形をした扉が設置されており、その扉

の横には小さな電化製品が付いてある。

それは何処からどう見ても電子レンジだ。

ジジ：ジジ：と火花が散る様な音、

そしてブザー音が鳴ると電子レンジの扉が

勢いよく開かれる。モクモクと煙が上がり

その中には小さなアイテムが置かれてあった。

「っ…できたっ！」

彼は飛び起きる。

同時に癖毛がピンツと跳ねると少年は

階段を駆け降り、脱兎の如く電子レンジらしき扉の前へ行き

中にあるアイテムを恐る恐る触り、取り出す。

それは造形が施された色鮮やかな小さなボトルだった。

「おおっ！掃除機…！掃除機フルボトルかっ！」

どんな能力が使えるんだろうっ、やっぱ掃除機だから

吸引力かな？となるとどのぐらいの吸い込み具合だろう？くうー

！早く試したいっ！」

無邪気みたくはしゃぐ姿はまるで子供。

彼がもつのはフルボトルという名のアイテムで文字通り掃除機の造形をした小さなボトル。

満面の笑みで少年は髪の毛をくしゃくしゃと掻く。

「やっぱ俺、天才物理学者の『桐生戦兔』が作った

発、明、品！その名も『自動ボトル浄化変換装置』！

もう10代のスペック遥かに超えてるよね、

超えてますよね！凄いでしょ！最っ高でしょ！

天才でしょーっ!!」

と、テンションフルMAXの自意識過剰なこの少年

桐生戦兔は発明品ボトル浄化装置を見てフルボトルをまた見ては忙しくはしゃぐ。

「戦兔、ボトル完成したの?」

「三玖っ！そうなんだよ！この天才物理学者の桐生戦兔が天才極まりない発明品を使って

完成したキュートで超かっこよk」

「戦兔、回りくどい。見せて。」

2階から吹き抜けの手摺に身体を預け、声を掛けてきたのは戦兔と

年齢は変わらないクールな女性

『なかのみく
中野三玖』。

青いヘッドホンを髪をはさむように掛けており、髪型はセミロング

で右側が隠れるような前髪になっているのが特徴。

戦兔の説明は日頃の付き合いなのか感入れず

割り入り右手を差し出すと

釈然としない表情でフルボトルを下投げで

2階の三玖へと投げ渡すと三玖は見事と両手でキャッチした。

「：刀」

「え?」

「刀じゃない…、掃除機なんてどうやって戦うの?」

刀か弓…火縄銃とか武器らしいものがない。」

「三玖、馬鹿言ってんじゃないよ。」

掃除機だって『ビルド』の力があれば凄い能力が使えるのは三玖も

知ってるだろ？

それに、武器ならドリルクラ」

「あれは刀じゃない。ヘンテコな武器。」

「いちいち茶々入れるんじゃないよっ、

それにヘンテコじゃない、ビルドの能力をフルに活かす最高の武器だ！

こうギュイーンと敵に攻撃して、ババーンツと！」

「戦兔、うるさい。擬音ばかりじゃ伝わらない。

それに何度も見てきたから説明はいい。」

「っ、一言で語れないものなの、天才の理論は。」

軽い溜息を吐き、螺旋状の階段を降りた三玖は

戦兔にフルボトルを渡す。

ブツブツと文句を垂れ流す戦兔を無視し、三玖は戦兔の顔を見遣る。

頬に腕の跡がくつきりと残っており、よく見れば

昨日と同じ私服の格好をしていた。

「・戦兔、また机で寝落ちっ？」

「仕方ないだろ、ここ最近「スマッシュ」の出現率が多くなっている。

人々の生活と平和を守るのが俺の仕事だからな。」

「・ちゃんとベットで寝ないとよくない。

それに戦兔はまだ17歳。戦兔にしか出来ない事でも、

無理はダメ。・心配s」

「やばっ！もうこんな時間かつ！三玖！

お前も早く支度しないと遅れるぞっ！」

ふと時計を見た戦兔、時刻は午前7時55分。

慌てて声を上げ、1階の卓から荷物を持ち

螺旋状の階段を駆け上がる。

三玖は心配気な顔で部屋から出て行く戦兔を見送り、

自分のペースで螺旋状の階段を登って行く。

1階に登り、ドアノブに手を掛ける瞬間、

作業机にある、赤と青色のフルボトルが目に入る。

「あ、…これ。」

☆☆☆

「あつ、おつはよーごいませー！桐生さん！

新しいボトルは出来ましたかっ？」

「おお、四葉、おはよ。そうなんだよっ。

天才物理学者の桐生戦兔が開発したこのそうg」

「ええ、本当ですか!?見せてください貸してください触らせてくださいー！」

「…人の話を最後まで聞きなさいよ。」

ドア：、と言うよりも【本棚】が開き、出てきた

戦兔に声を掛け、早々と掃除機フルボトルを

戦兔から取り上げたのは、なかのよっぱ中野四葉。

ボブカットのショートヘアに緑のうさ耳リボンを
つけているのが特徴。

活発的で明るい性格をしており、身内以外には 誰に対しても、相手が年下だろうと丁寧語で話してみたいだ。

溜息しつつ、四葉を後にした戦兔は『5つ』ドアがある

廊下を歩くと戦兔の部屋と同様だが、二回りも大きい吹き抜け式のリビングとなっており、朝の日差しがリビングを照らし高そうな家具や壁が反射し

煌びやかな光景が目に入る。

どうやら此処はメゾネットタイプの高級タワーマンション。

階段を降りるとテーブルの上にはトーストと

ジャムやマーガリン、コーヒーが置かれてある。

それと同時に置き手紙らしきものもあり、

『足らなかつたら自腹で買いなさい。』と言う内容だった。

戦兔は軽く鼻で笑うと何もつけずにトーストを

手に取り、齧る様に一口を食べる。

「桐生さーん！結構時間がないんで

私もそろそろ出ますねー！」

「おう、っっておいつ、ボトルっ。」

「あ、忘れてました！受け取ってくださいっ！よっ！」

急いで出ようとした四葉は立ち止まり、

持っていたフルボトルを軽い上投げで戦兎へ投げ渡し

「先に行ってますよー！」と天真爛漫の笑顔で

彼女はリビングから出て行った。

初めて見る制服姿はどこか新鮮な姿で

戦兎も持っていたトーストを頬張り、用意していた

学制服へと早々に着替える。

今日は5月の後半。訳あってこの家の《姉妹》、そして

戦兎はこの市にある『旭高校』へと編入する事になっていた。

制服に着替えた戦兎は洗面所に向かい、

軽く歯磨き、洗顔、髪を整えると再びリビングに戻り

制服の側に置いてあった男子生徒用の鞆を肩に下げる。

ふと、窓の外を見遣る。

高級マンションでここは30階。

街中を見渡せる景色は絶景で贅沢な場所。

だが、戦兎が目にしたのは街ではなく、聳え立つ黒い壁だった。

「…何か思い出した？」

「お、三玖。何かって？」

「憶けないで。記憶だよ。私達姉妹がここに引っ越してきたあの日、

このマンションのすぐ近くで記憶喪失の

戦兎を拾ったの私なんだから。」

「人を野良犬みたいない言い方をするのはやめなさいよ。

拾ってくれた事、部屋を与えてくれた事には本当に感謝している。

でも記憶は全然思い出せないんだよな。

あの壁の事も、桐生戦兎って名前だけが分かるけど、俺が何者でこ

の力が使えるのかは、

ピンとこねえんだよ。」

いつの間にか学生服に着替えていた三玖に答え、再び戦兎は窓から見える黒い壁を目に映す。

これは地球上誰もが知っている歴史上最大の出来事。

10年前、火星有人探査から帰ってきた宇宙飛行士の火星期間セレモニーが東京で行われた。

そのセレモニーの最中、突然男性が

持ち帰った四角い箱型、通称“パンドラボックス”と呼ばれる箱に
触れ、

パンドラボックスは赤く輝き出したのだ。

事態、いや、日本は一変。

パンドラボックスを中心に地中から

見たことのない巨大な壁が3方向へと聳えたつた。

日本を分裂するかの様に立つ壁は“スカイウォール”と呼ばれ、

日本は『東都』『北都』『西都』の三つの国へと別れたのだ。

一度は国と言う発展、経済を失いかけていた日本は

それぞれの首都にまとめ上げる首相を代理として

立ち上げ、徐々に経済の回復へと向かっていくが、

未だに国としてまとまらず、互いの首都は

分裂されたままの状態が10年後、現在も続いている。

戦兎達がいるここ愛知県は今では

『東都 エリア：A-1』となっている。

「何とか受け入れてくれてよかったね。」

『『二乃』や『五月』には毛嫌いされてるけど、

男子の俺が突然来て無理もないか。

“五姉妹”と聞いた時は驚いたな。」

少し自己紹介をしよう。

彼の名は“桐生戦兎”。

自称：天才物理学者と名乗る17歳。

天才を自称することに全く遠慮がなく

10代にしてその発想力と技術力は並大抵の大人より

負けない頭脳を持っており、身体能力も抜群。

美形男子と言ってもおかしくないほど顔が整っておりまさに容姿
端麗、頭脳明晰。

若干理系に片寄りがちなナルシストだが、

側から見れば普通の高校生。

如何やら、彼は記憶喪失らしく、中野三玖と

その姉妹に保護され、生活を共にしているようだ。

「っ！やばっ！三玖！時間っ！」

「8時15分…。やばいな、今から走っても間に合わないよ。」

「あー！…と。」

そんなお急ぎの貴方には、これっ。」

三玖等の自宅から学校までは大凡30分は掛かり

全力で走っても始業タイムは8時30分。

当然間に合わない。

諦めかけてた三玖に戦兎は鞆からあるアイテムを取り出した。

正面から見れば「スマホ」だ。

だが、よく見れば背面に手を加えられているパーツが組み込まれて

おり、車輪の様な形をした物も見える。

「…仮病？」

「あ、そうそう。もしもしくって違う違う。」

「じゃあ素直に遅刻の電話？」

「そうそう。実は出るのが遅れてしまいく、

ってな訳ねえだろっ。俺の、『発明品』さ。」

戦兎はポケットから真っ白で何も造形、色も施されていない

「エンプティボトル」を取り出すと、

スマホの背面にあるソケット部分『フルボトルスロット』へ、

エンプティボトルを差し込む。

【ビルドチェンジー】

スマホから音声が鳴ると戦兎はいきなりスマホを

軽く投げやると、驚く事にスマホは人並みの大きさへ巨大かし、ガチャガチャと刻み良く機械音が鳴ると、ものの数秒足らずでそれは「バイク」へと変形した。

「っ!?これ、バイク…っ!?凄い…!」

「ねっ！俺の開発品その名も『マシンビルダー』！

凄いでしょっ?最高でしょっ?天才でしょっ?」

「これなら、遅刻せずに済む。：戦兎って免許持ってたの?」

「失礼な。勿論あるぞ。：本当かなく?みたいな目で見るんじゃないよ。」

マシンビルダーのメーター部にはモニターが

搭載されており、ヘルメットマークのアプリを

戦兎はタップすると、シートに転送されるかの様に

ヘルメットが2個出現。「うわあ。」と驚く三玖の声が聞こえ、喜ぶ

戦兎は早速ヘルメットを被り

マシンビルダーへと跨がると、。

「よしっ！それじゃあ旭高校へ、しゅっぱー」

「しちやダメ。ここ、家の中。」

☆☆☆

「はあっ、はあっ…！すみません…！通りますっ…!」

少し時間は遡り、午前8時10分。

人混みをすり抜け、息切れを起こしながら走る

この男の子は上杉風太郎。

黒い短髪で、頭頂部に二本のくせ毛が特徴、目つきが悪い。

学生服を着て全力で走って登校してるのは

側から見る限り遅刻しているのは間違いないだろう。

「くっそ！迂闊だった…！深夜3時まで勉強する、

俺のルーティンがっ…！遅刻を招く事になるとは…！」

それは寝過ごしてしまおうとツツコミたくなる

愚痴をこぼしながら風太郎は息切れをしつつ

曲がり角を曲がり走る。

「…この路地…、やむを得ない！」

走るのを止め、風太郎は壁で遮られた薄暗く狭い路地を見つけると、仕方ないとした顔でその道を駆け出す。

その路地は狭くてゴミが散らかって誰も通りたがらない道だが、

風太郎の計算上、近道間違いなしの通り道だ。

だが、事件は突然と起きるものだ。

その薄暗い壁に重力を無視して壁に二足を着いて立つ、まるでコウモリのようなじんぶつ怪物がいた事を、

「デビルスチーム！」

ドスの効いた不気味な音声が鳴るが

風太郎は気付きもせず走り抜けて行った。

☆☆☆

「ううっ…！戦兎、もう少しゆっくり…！」

「駄目だ。計算上、このスピードで走行しなきゃ

間違いなく遅刻する。何だ？ビビってんのか？」

「っ、ビビってなんか、ないっ…！」

マシンビルダーに乗って走行中の戦兎と三玖。

少し飛ばし気味の戦兎に怯えながらも強気な態度をとる三玖。初めてバイクに乗るのだから怖がるのも無理もない。

「三玖っ、肩じゃなくてシート横に掴むところがあるだろ？」

「うう…！分かんないよ…っ。」

「ああ分かったっ。ならせめて腰の方掴んでくれ。」

肩持たれると運転しづらい。」

「…(うう?)」

「おっふっ!?!」

戦兎に言われるがまま三玖は腰に巻き付く様に手を入れる。

が、実は中野姉妹はなかなかの胸の持ち主で三玖もその中の1人。密着するバイクでは当然の如く柔らかい感触を押し当てられる。

流石の理系で恋愛に興味なさげな戦兎もこの不意打ちには

応え、声も出してしまうのも無理はない。

「どうしたの? 苦しかった?」

「いっ、いや。大丈夫だ…っ。それより、三玖は平気か?」

「平気…、これ凄く安心する…。」

「そ、そうか…。」

ホッと一息を吐いたその時。

『ウオオオオーーツ!!』

「っ！うおっ!!?」

「きゃあっつ!?!」

突然茂みから雄叫びと共に巨大な物体が飛び出し、

走行中の戦兎等の行く手を通さんとばかりに立ち塞がったのだ。

咄嗟の出来事に戦兎は持ち前の反射神経と身体能力で

バイクを一気に傾けて物体を紙一重でかわす。

三玖も強く戦兎を抱きしめてた事で落下せずに済み、

何とかかわせることができた戦兎はブレーキを踏み

ニユートラルに入れたバイクを止める。

「三玖！大丈夫かつ!？」

「っ：平気っ。何が起こったの…?」

「…どうやら、遅刻確定らしい。」

「えっ…?」

ヘルメットを取った三玖は戦兎が睨む方角へ視線を向けるとそこにいたのは異業な姿をした怪物だ。

青色をベースにゴツゴツとした肉体に人一倍はある大きな巨大。

人間を遥かに上回る怪物の腕を見る限り

打撃の攻撃を得意としてくる様な拳を持っている。

『『スマッシュ』：!』

三玖は声を漏らす。

そう、このスカイウォールの惨劇から10年が経った

近年、近頃東都街中で未確認生物が目撃されるというニュースが相次ぎ、同時に行方不明者も複数で起きている事件が起こっていた。

その未確認生物の名はネットでは「スマッシュ」と呼ばれ、東都はそれを利用し、公式で発表されていた。

だがスマッシュの生態、目的、行動は把握できておらず

現在も調査を進めている段階。

もし見かけた場合はすぐにその場から立ち去り、至急東都政府に連絡する様呼びかけられている。

勿論、今この状況はすぐに逃げ、政府に連絡するのが今現在生き残れる唯一の手段だ。

生身の人間が相手をするどころこう言ってるレベルじゃない。

実際に公になってはないが死傷者も出ているらしい。

だが、それを踏まえて、三玖は落ち着いていた。

そして、戦兎は三玖の前へ一歩、二歩と前進し、

スマッシュへと近づく。

彼もまた、落ち着いて、

「スマッシュか。目撃情報がないって事は急に何処からか現れたのか？また新しい情報が出来ちまったな。」

「戦兔、今は無駄話している暇はないよ。」

「ああ、分かっている。」

戦兔はスマツシユの動きを伺いつつ、チラチラと辺りを見渡す。ちようど人気のいない場所を通学していたので辺りに人はいない。

それは今から行う事をするに最適な環境でもある。

戦兔は周りに人がいない事を確認するとニヤリと頬を上げる。

「こんな場所で堂々と変身できるのは

今の記憶じゃ初めてかもな。」

「呑気な事言ってるで、これっ。」

「あっ！忘れてたのかっ。これがないと俺のビルドは始まらないんだよな。サンキュー三玖。」

「…、うん。」

頬が赤くなる三玖は持っていた「二つのボトル」を

戦兔に渡し、すぐに茂みの中へと隠れる。

それを見送った戦兔はスマツシユへと再び目を向ける。

そのスマツシユ、「ストロングスマツシユ」は

少し待たされたのが原因か闘牛の様に片足を

地面に何度も擦り蹴り上げる仕草を見せる。

だが戦兔も準備が整ったのか、懐からとある物を取り出した。

手回し式のレバーに、何かを差し込む様な形をした窪みが2つ、

円盤型のパーツの付いた、謎のアイテム。

戦兔はそのアイテムを腰に宛てがうと

アイテムの両サイドから黄色いベルト

「アジャストバインド」が戦兔の腰へと巻かれ、

自動的に腰へと装着される。

それは、ベルト。

その名は「ビルドドライバー」。

ビルドドライバーが腰に取り付けられ、戦兔は

先程三玖から受け取った2本の小さなボトルを取り持つ。

赤いウサギの柄が入った造形のボトルと、

青い戦車の柄が入った造形のボトルだ。

「さあ、実験を始めようか。」

戦兎は、二つのボトル

“ラビットフルボトル”と“タンクフルボトル”を振る。

『ツ?!?!?!』

何か始める、そう思ったのかストロングスマッシュは

戦兎に襲い掛かろうとするが、戦兎の左右から現れた立体式に映し出された無数の“数式”に立ち止まっていた。

十分に振り、ボトルの中にある成分“トランジエルリゾット”を活性化させた所で、キャップの部分にあたる、シールディングキャップをボトルの正面に

指で固定する。

それぞれのボトルをビルドドライバーの窪み部分

“ツインフルボトルスロット”に順番に差し込んだ。

『ラビット!』

『タンク!』

『ベストマッチ!』

癖のあるテンションの高い声とリズムを刻む待機音声がビルドドライバーから鳴ると、

「やっぱり変な音…」と茂みの方からボソツと聞こえてきたが

戦兎は無視し、ドライバーに取り付けられた

手回し式の赤いレバー、『ボルテックレバー』を握り、

回し始める。

何かを製造するかの様なアップテンポ調の音楽が流れ出し、

ドライバーから透明なパイプのようなものが伸び、

それは戦兎の周囲を瞬時に囲う。

透明なパイプ『スナップライドビルダー』という

高速ファクトリーが展開。そして赤と青の液体が

パイプに流れ、戦兎の前後にそれぞれ、人を

半分半分にした様な形を形成されていく。

その頃外野の三玖は思う。

何故うさぎと戦車、合い見えない2つが

ベストマッチなんだろう?と、

今だにその謎は解かれていないままだ。

だがこれだけは確信していた。

彼は、桐生戦兎は、あのスマツシユを止める事が出来る、、

『Are you ready?』

「変身っ!」

ー正義のヒーローなんだって。

音声と共に戦兎はファイティングポーズを構えた。

赤と青のアーマーを形成したスナップライドビルダーが彼の身体を挟む。

形成されたアーマーが戦兎の体を挟むように着装された。

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエエーイ!!』

音声が高鳴り、ここに現れる1人の戦士が誕生した。

白い蒸気を胸部辺りから噴き上げ、戦兎、否。

戦士は決めポーズを取る。

彼はこの東都の市民と平和を脅かすスマツシユに立ち向かう、

「勝利の法則は、決まった!」

仮面ライダービルドだ。

――

次回！仮面ライダービルド×五等分の花嫁

〜五等分のベストマッチ〜

「時間に余裕がなくてね。さっさと済ませちやおうか！」

スマッシュとの戦闘になる登校中の戦兔、

「焼肉定食焼肉抜きで。」

いよいよ学校生活始動の戦兔達。

「やっぱり信用できません。」

「アンタ、怪物の仲間じゃないの？」

心開かず、居場所が狭くなる戦兔。

第2話 過去と今のミッション

第2話過去と今のミツシヨン

ある雨の日の出来事だった。

中野家はある事情をきっかけに父親の元から離れ
東都エリアA―1、昔は愛知県と呼ばれる場所へと
引越すをする事になっていた。

一通りの事は済み、中野三玖はコンビニから帰る途中。

その手に持つ袋の中身は抹茶ソーダという如何にも組み合わせが
悪そうな缶飲料が数本入っていた。

「傘、持ってきてきて正解だった。二乃に感謝だね。」

天候は急に変わるもの。買い物に行く前に

中野5姉妹の次女、中野二乃に持っていけと言われたのだろう。
空を見ながら呟く三玖は少し早歩きとなり

マンシヨンへと帰宅していた。

この先の曲がり角を曲がればマンシヨンの入り口、
と言っても高級マンシヨンなのでコンビニからでも
はつきりと聳え立つのが見える。引越したばかりでも
相当な方向音痴とかではなければ間違える筈がない。

その時だった。

「えっ？人っ？」

曲がり角を曲がった三玖の目先に映ったのは

雨の中に立ち尽くす1人の青年がいた。

歳は三玖と変わらないほど若く見える。

多雨だったため当然青年は
ずぶ濡れていた。

傘を忘れたなら言うまでもないが何処かで雨宿りするのが一般的
だろう。

しかし、彼は微動打にせず、ただ空を見上げて立っていた。

異変に気付く三玖は若干人見知りではあったが
放つてはおけなかった。

そして、ゆっくりと彼に近付き

「…あの、…どうしたの…ですか…？」

勇気を出して声を掛ける。

青年は三玖の存在に気づくと、
深刻な顔をして、

「…俺、何でこんなところ…？」

…ここは、何処なんだ？…何も思い出せない…。」

三玖は驚き目を見開く。

何も思い出せないという言葉に耳を疑うが
こんな所でしかも雨天の中立ち尽くす男が
嘘をつく様には見えなかった。

「…自分の名前、分かる？」

「…名前…。」

俺の、名前は、桐生…！」

桐生 戦兔…っ。」

「桐生戦兔…？変わった名前だね。」

他は思い出せる？」

「…いや、全く。」

思い出そうと眉間にしわを寄せたが、
すぐに諦めたのか間抜けな表情で返す。

「…。そんなに濡れてたら風邪を引く。」

うち、すぐそこだから来て。」

「え、…でも、いきなりお邪魔なんて。」

家族に迷惑だろ？しかも君、女の子だし。」

「…多分大丈夫。それに戦兔は行く宛あるの？」

「いや、…ないけど…。」

「なら行くよ。」

「うおつととー！ちよつと待っ！」

普通なら、知らない人、増してや初対面の人など

気に止めもしない三玖だが何故か、どうしてなのか

この戦兔はどこか放つて置けない。

そんな気がしたのか、少し強引気味に戦兔の手を引き、

歩き出したその時、ガシャン！と
何か落とした音が聞こえた。

「これ、何？」

「……これは……。」

見るとそれは戦兎の懐から落ちたものであろう物だったが、
見た事のない造形が施されたアイテム、そう、

“ビルドドライバー”と2本の“フルボトル”だった。

☆☆☆

『グオオオオッ!!』

「よつと！」

戦士、仮面ライダービルドは雄叫びと共に突進してくる
ストロングスマッシュから軽い身のこなしで避ける。

距離ができたビルドは一度腰を落とすと

左足が赤く光り、太もも部にあるアーマーが

バネの様に伸縮し、勢いよく踏み出す。

すると、一瞬でストロングスマッシュの目の前まで跳躍し、

一撃、二撃と殴り、蹴り飛ばす。

『グオオオオッ!?!』

「よし、こいつを試してみるか！」

大きく吹っ飛んだスマッシュは豪快に転び
痛みが走るのか蹴られた部分を抑え叫ぶ。

そしてビルドが取り出したのは今朝完成した

掃除機フルボトルだ。2、3回振り、

シールドディングキャップをボトルの正面に固定、

『掃除機！』

それをタンクフルボトルと入れ替え、
ボルテックレバーを回す。

するとスナップライドビルダーがすぐに展開し、そのパイプの中
を、水色の液体が流れ始め、

新たなアーマーを形成する。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

水色のアーマーが、青色のアーマーの上に重なるようにビルドに装
着され水色のアーマーが重なると同時に

青色のアーマーは粒子となって消え、そして

水色のアーマーがビルドの新たな装甲となって完成する。

先程の癖の強い声は一切聞こえず、陽気なメロディが
ビルドドライバーから鳴り響く。

これはベストマッチの組み合わせ以外で変身した形態

“トライアルフォーム”と呼ばれるものであった。

名付けて“仮面ライダービルド トライアルフォーム
(ラビット掃除機)”。

『…!?!』

「そう恥ずかしがらずに、こっちへおいでっ！よっ！」

先程とは打って変わって警戒したのか

近づこうとしないスマッシュ。

だが、ビルドは掃除機の先端が丸々くっついた様な
装甲の左手をスマッシュへ向けると、

吸い込みが作動する。

『ツツ!!?』

「思ってたよりも、凄い吸引力だなっ！」

「どうだ三玖！掃除機も、馬鹿に、出来ないだろ!?!」

「う、うん…いきやあつ…凄すぎる…!」

ビルドが興奮する通り、ものすごい吸引力で

スマッシュも耐えるのがやつとだが徐々に距離は狭まって行く。

辺りも風で巻き込まれる程凄まじく、

距離が離れている三玖にも影響が出るくらいだった。

耐えきれなかったスマッシュは一気に距離を縮められ

ビルドは再び一撃を入れ、あろうことか

掃除機で薙ぎ払うかのようにスマッシュを攻撃した。

どうやら戦闘用に強度も高いらしい。

「時間に余裕がなくてね。さっさと済ませちゃおうか!」

『タンク!』

『ベストマッチ!』

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエエーイ!』

ビルドは再びラビットタンクフォームに戻ると

ボルテックレバーを回す。

『Ready Go!』

「ちよーっと、待ってね。」

ボルテックレバーを回し終えたビルドは

スマッシュにそう告げると、何と敵を背に向け走り出した。

その行動にスマッシュも首を傾げる仕草を見せる。

何歩か走った所でビルドは右足で思い切り地面を踏みつける。

するとビルドが立っている部分だけ陥没し、

ビルドは地中に姿を消した。

『ッ!?!』

気を取られたスマッシュに何処から現れたのか

巨大な白い、*“グラフ”*の様な形をしたものが
左右から現れ、スマツシユを拘束するよう挟み込む。
真横から見ればスマツシユを拘束しているのはX軸だった。

「はっー！」

ビルドは地中深くから飛び出し、巨大なグラフの

Y軸上まで飛ぶ。そしてそのグラフの放物線に従う様に線の上を
滑り落ち、スマツシユ目掛けて

*“蹴り”*をぶつけた。

「はあああっ!!」

『ボルテックファイニッシュュー！イエーイー！』

渾身の一撃。必殺技とも言えるその威力は

スマツシユを蹴り飛ばし、火花を散らしながら

空中で緑色の炎を上げ、爆発した。

ビルドはその光景を確認した後、深く息を吐き

ドライバーに装填されてる2本のフルボトルを

抜き取ると、アーマーは粒子となって消え、

戦兔の姿へと戻った。

戻った戦兔はポケットからエンブレイボトルを取り出すと

シールディングキャップを固定し、横たわるスマツシユにキャップ

の先端部を向けた。

するとスマツシユは粒子となり、その粒子が

ボトルの中へと吸い込まれる様に抜き取られていく。

抜き取り終わるとボトルは膨れ上がるような造形となり、

シールディングキャップを回して戦兔はポケットにしまい込む。

そして、*“横たわっている男性”*を見遣る。

「よしっ、と。おおい。大丈夫か？」

「戦兔。この人、戦兔と同じ学生服。」

横たわる男性に戦兔は声を掛けてしていると

茂みに隠れていた三玖が歩み寄る。

よく見ると男性は今から向かう旭高校の服装をしており、見た目からして戦兔等と同学年の風格だった。

「こんな学生にまでスマツシユにされちまうなんてな。」

「戦兔も学生でしょ?」

「いちいち食いつくんじゃないよ。」

「おい、大丈夫か?」

「:はっ!」

「うおっ!」

「きゃっ!」

戦兔は倒れてる男性の頬を軽く叩くと、

男性は急に起き上がり、戦兔と三玖はびっくりしてしまい、

三玖に至っては尻餅をついてしまう。

「えっ?は?:::ここは?あれ?」

「君、スマツシユになっていたな。怪我はないかい?」

「:すまっしゅ?てか、あんた等誰だ?」

「おいおい、命の恩人なのに礼儀知らずな男だねー。」

俺は桐生戦兔。街の愛と平和を守る

仮面ライダービルドをやっている。」

「私は中野三玖。:スマツシユを知らないの?」

東都では結構有名よ?」

「:ちよつと待ってくれ。情報が追いつかない。」

男は頭を抱えながら立ち上がると辺りを見渡し始める。

「えつと、スマツシユ:だっけか?」

確か学校で噂になっているのは知っていたが:。

何だ、スマツシユって。」

「仕方ない、この天っ才!物理学者の桐生戦兔が

分かりやすく説明してあげよう!

予測だがスマツシユは人間に

ある特殊な成分を注入させられそれが人間の体内で

化学反応を起こし、人体に影響され、変貌。

それがスマツシユだ。スマツシユになってしまえば

自我を失い見境なく破壊衝動に襲われちまうって事。

そしてその間の記憶までもが失われちまう。」

「言われてみれば、全然思い出せない……。確か通学の途中……。」

「そーで、そのスマッシュを止めるのがこの俺、

桐生戦兎が開発したビルドd」

「あぁっ!!」

「うおっ!?何っ!?」

「悪い！俺急いでるんだ！」

と、言い残すと男性は急いでその場から

走り去ってしまった。

「つたく、お礼の一つもないなんて無神経な男だな。」

「・無理もない。スマッシュになって頭が混乱している。」

それに、戦兎の話が長いのもある。」

「長いつて失礼だなー。スマッシュの事が分からないんだから、説明

するのが筋ってもんでしょーよ。」

「うるさい。ほら、戦兎。私達も行かないと。」

三玖はやれやれと言わんばかりな顔をしながら

止めてあるマシンビルダーの近くまで行き、

ヘルメットを被り出す。

時刻は8時40分。完全に遅刻だ。

戦兎も納得のいかない顔をしつつも歩き出そうとする。

ふと、地面に目がいく。

そこには生徒手帳が落ちていた。

「上杉…、風太郎？」

☆☆☆

「あぁー。初日なのに遅刻した挙句先生に怒られたと…。

最悪だ…。」

「なあに桐生君。しよげてるの?」

でも、スマツシユと遭遇したんじゃ、しょうがないよ。

お姉さんが元気づけてあげよつか?」

「いやいいよつ。戦利品は手に入ったし。」

「相変わらず女の子には興味ないな。」

そんな事じゃモテないぞ?」

「うるさい、俺は科学と情報集めその他諸々で忙しいの。

あー、学校なんて本当は行きたくなかったのにい。」

あの後、旭高校に到着した戦兎と三玖は

校門前の生徒指導の先生に怒られてしまった。

その後、編入生として教室へ案内され、

現在昼休みの時間となった出来事だ。

テンションが下がる戦兎に声を掛けたのは

同じクラスとなった中野一花^{なかのいちか}。

アシメントリーのショートヘアが特徴。

中野五姉妹の長女でお姉さんだけあつて

悩み事や相談事はなんでも聞いてくれる面倒見がいい子だ。

だがいつも胸元のボタンは一つ開けており、

目のやり場に困る事もしばしば。

「文句言っちゃダメ。記憶喪失で学歴も分かんなくて

17歳の君はどこかの高校に通ってたんだと思う。

私達と同じ高校に編入させたんだから

ちよつとは感謝して欲しいくらいだよ?」

「逆にあんなデタラメな志望理由を書いて

よく編入できたよ、俺。」

そう、戦兎は嘘の志望理由を書き、面接を受けたのだ。

受かるはずないと思っていた数日後に合格の通知が

届いたのだから当時驚いたのも無理はない。

「まあ、無事来れたんだから、早くご飯食べよう?」

他の4人もきつと学食に集まっているはずだから。」

「あーそうだな。鱻の開きとかないかな。」

「もー、桐生君本当鰹の開き好きなんだね。

おじさん臭いよ?。」

苦笑しながらも戦兎と一花は教室を出て学食へと向かう。

この旭高校は学食があるらしく生徒の8割以上が

ほぼ学食で昼ご飯を済ませてるらしい。

早めに行かないと混雑してしまうと、先程

クラスの生徒が言っていたので戦兎と一花は

教室を後にした。

☆☆☆

「鰹の開き定食で。あと卵焼き追加で。」

「あいよっ!。」

食堂にたどり着いた戦兎。だが、先程言った通りの

混み具合で食堂は生徒のバーゲンセールの人で溢れかえって
いた。

気付けば一花とも逸れ1人となった戦兎はトレーを持ち、

カウンターで注文をしていた。

メニューが豊富で好物の鰹の開きもあったので

若干興奮してるのか戦兎の頭には癖毛がピンッと

跳ねていた。

「はいお待ちどうぞ!650ドルクね!。」

「あざーすっ。」

元気のいい食堂のおばさんは奥から持ってきた

皿をトレーの上に並べてくれる。

トレーの上に置かれたのはメインの鰹の開き、

ご飯と味噌汁にお新香、そして追加で卵焼きが並べられている。

戦兎は緑色の札を1枚出しお釣りを受け取る。

実はあのスカイウォールが現れて3つの国に分かれた時、その国々で使えるお金が円ではなくなつたのだ。

東都では“ドルク”北都では“ホルク”西都では“ルルク”となっている。

1ドルク、ホルク、ルルクは以前の日本円にして1円。

これだけついて650ドルクは安い。戦兎はお金を支払い、トレーを持ち、動こうとしたその時だ。

「焼肉定食、焼肉抜きで。」

「…え？」

衝撃の一言が聞こえ、思わず声が漏れてしまった。

確か確実に今戦兎の後に注文していた

男子生徒から声がしたのは間違いない。

問題は注文内容だ。焼肉定食を頼んで焼肉抜きと、

確かに聞こえた。男子生徒はお金を支払い、

トレーを持ち振り返った瞬間である。

「あ。」

「…あ。」

お互い顔を見るなり声を漏らす。

そう、彼はスマッシュとなつた上杉風太郎本人だつた。

「…何だ？」

「え？いやいや、何だはこっちの台詞。

焼肉定食焼肉抜きって、え？どゆこと？ダイエット中？」

「悪いか？」

「いやまあ、悪くはねえけど、予想外な

注文でびっくりしただけだ。」

「そうか。てか、お前もここの生徒だつたんだな。」

「ええ…？今更気づいたの？まあ積もる話もあるから、一緒に食べないか？それに…。」

戦兎は周りを見遣る。

「見ろよ、また上杉の奴焼肉抜きだぞ？」

「いつもいつも変な頼み方するよなあ？」

「もう1人は誰？あの上杉の知り合い？」

などと風太郎と戦兎に周りの生徒は眩き

特に風太郎には嫌味を吐かれる始末だ。

どうやら訳ありと察した戦兎は橋側に空いている

2人席のテーブルに目で指すように向けると

風太郎はしよがなさそうな顔をし、承諾した。

奥側の席に先に着く戦兎、そして風太郎も座ろうと

トレイをテーブルに置いた瞬間だった。

もう1人別の生徒がテーブルにトレイを置いたのだ。

「えっ？」

「はっ？」

「…お、五月。」

戦兎は名前を呼ぶ。

その生徒は中野五月^{なかのいつき}。

中野五姉妹の中の末っ子でウェーブのかかった

長い髪が特徴で前髪の一部が長く後ろに伸びている。

星形の髪飾りを前髪に着けておりアホ毛の様にピンと

生えている。

五つ子の中では常識人で真面目だが真面目過ぎる故

失敗をしてしまうこともしばしば。

「あの！私のほうが先でした。私は桐生君に用があるので

隣の席が空いているのでそっちに移ってください。」

「え？そうなの？」

「悪いがここは俺達が毎日座っている席だ。

俺もこいつに用があるからあんたが移れ。」

「え？毎日？俺座ってよかった？」

バチバチと睨み合う2人に若干惑う戦兎だが

このまま放っておくと喧嘩になりそうな雰囲気を出し始める。

「あー、俺が隣の席に行くよ。五月がここに座れば

2人まとめて用件聞けるからさ。」

「…ですが、私の用件は今朝、の出来事です。」

「奇遇だな、俺も今朝、の事だ。」

「貴方も：？桐生君、貴方何をしでかしたんですか？」

「おいおい誤解を招く様な言い方やめてくれ。」

説明するから2人共座りなさいよ。」

また、周りの視線が戦兎等に向かれる。

嫌気を指した戦兎は、前に風太郎、横の席に

五月が座る。我慢出来なかったのか風太郎は

先に食べ始めていた。

「五月。他の姉妹は？」

「いただきます…、え？ああ、

4人なら向こうで食べてますよ。席が足りなく

1人で食べようと思つたら偶然桐生君がいたので

仕方なくこちらに来ました。」

「仕方なくね…。で、用は何？」

「では単刀直入に伺います。何故朝遅刻したのですか？」

「はあ、何だ三玖から何も聞いてないのか？」

「聞けてないから今こうして聞いてるんじゃないですか？」

でないとわざわざ貴方と食卓を共にする事なんてあり得ません。」

頬を膨らまし、五月は一口うどんを口に運び啜る。

今更だがよく見ると五月のトレーにはうどんに

トッピングを加えたのか海老天が2つ、かしわ天1つ、

さつまいも天、更にデザートにプリンまで頼んでいる。

風太郎も目を見開いていたが戦兎は知っていた。

この子は見かけによらず食欲旺盛の女の子だ。

五月は五姉妹の中でも中々の短気な性格で

戦兎と会話をして途中でも怒られ、心開けずにいた。

短気故か、食欲も増すのだろうと戦兎は勝手に

推測している。

「まあ、用件は大体分かっているが、登校途中にスマ

「…ああ、遅れた原因は俺だろ？」

スマッシュって奴になつたらしい。」

「え、ええっ!？」

割入って口を挟んで来たのは風太郎だった。

その事実には当然驚く五月。

すると風太郎は一度箸を置き、

何か言いづらそうに戦兎の顔を見遣る。

「その・朝は悪かったな。少しだけ記憶が戻ってきたんだけど、

あんたが、助けてくれたんだろ？」

「・へへっ。何だ、お礼言えるまともな奴じゃねえか。

それに、あんたじゃない。俺は桐生戦兎。

今日編入してきたばかりだ。よろしくな、上杉。でよかったか？」

戦兎はくしゃつと笑顔を見せ、ポケットから

今朝拾った生徒手帳を風太郎に差し出した。

「・俺の生徒手帳っ？何で桐生が？」

「今朝落ちてたんだよ。名前しか見てないから

安心しときなさい。」

「まあ何だ・とりあえず、色々サンキュー・。」

他人と話すのは苦手なのだろうか風太郎は

戦兎の顔をまともに見ず、生徒手帳を受け取る。

「風太郎、何でスマッシュになっちゃったか

そこら辺の記憶は覚えてるか？」

「えと・悪い。そこら辺は記憶飛んじまっている。

登校中に路地裏に入ってそこから・記憶がないんだ。」

「んんっ！あのっ！」

突然咳払いし声を掛ける五月。

「先程から親睦を深めている様ですが、

私がいる事をお忘れですか？」

「悪い、忘れてた。」

「なっ!?!もう知りません!？」

☆☆☆

「んん〜っ!! あー、疲れた。」

「何で天才の俺が授業なんて受けなきゃいけないの。」

「高校生レベルなんでもとつくに卒業してるのに。」

「あははっ。桐生君、17歳の君が言っても説得力ないよ?」

「授業が終わり、同じクラスの一花と下校する戦兔は

大きく背伸びをし、気怠そうに欠伸をする。

その後、五月は食べ途中のうどんをトレー事持ち

戦兔と風太郎の席を離れてしまった。

その後すぐに風太郎も自身の携帯電話が鳴り、

食事を早急に食べ終え、席を離れた。

戦兔は結局1人で食事を済ませ、その後は特に何事もなく

今現在に至るわけだ。

「…本当、桐生君って凄いいよね。色々開発しちゃうし、頭もいいし。あの空き部屋があんな秘密基地になるなんて最初はびっくりしちゃったな。」

「そうでしょーっ? 俺の天才的な頭脳を持ってしまえば

あんな朝飯前だっ。」

一花に褒められて戦兔は鼻を高くする。

そう、三玖に拾われ一緒に住む事になって

戦兔には物置部屋を借りる事になったのだが

数週間後には自分でリフォームを行い、今の部屋に至る。

扉も改造し、本棚を側に付けた隠し扉の様に作られている。

五姉妹も驚くほどの才能の持ち主だから

羨ましそうに見える一花も内心嫉妬しているのだろう。

「ね、桐生君。この先のお弁当屋さん

焼き立てのパンも売ってあるんだって。

少しお腹も減ってきたし、寄ってかない?」

「え? ああ、そうだな。寄ってみるか。」

「やったあ。桐生君の奢りだねっ。」

「いやいや、俺金そんなに持つてねえし。」

「こんな可愛い女の子に奢らせる気？」

「こんな記憶喪失の可哀想なイケメンにお金取る気？」

「うっ、記憶喪失はずるいよお。」

「わかった、お姉さんが奢ってあげる。」

「ゴチになりまーっす。」

手を合わせ戦兎は少し早歩き気味に歩き出す。

仮にも戦兎は居候。お金は毎日五月等から貰っていたが

編入前に実はネットでバイトを始め、

自身の生活費分は稼いでいる。

それでも自身の生活費分だけなので

人に奢る程の余裕はあまりない。

さて、数分後。

たわいもない世間話をしながら歩いた戦兎と一花は

一花が言っていた店“AAA—MATE”という名の店に

たどり着くが、戦兎は「：最悪だ。」と言って立ち止まる。

「：あ、戦兎に一花。」

「……。」

「げっ！…一花。何でそいつと一緒にいんのよ？」

そこにいたのはガードレールに腰掛ける三玖、

戦兎を見るなり頬を膨らませ、じと目で睨む五月、

そして同じく戦兎を見るなり嫌な顔を出したのは

五姉妹の二女の中野二乃。

ぱっつん前髪で姉妹の中では1番のロングヘアの髪型で

左右に黒い蝶の髪飾りを着けているのが特徴。

姉妹1番のどがった性格をしており、

反応を見る限り一緒に住む事になった戦兎をこの上なく

嫌っているみたいだ。

「二乃。そんなにカリカリしてたらダメだよ？」

それに桐生君は今一緒に住んでるんだから

仲良くしないと、ね?」

「仲良くなつてできないわ!突然家に来て

記憶喪失を理由に一緒に住むなんて普通あり得ないでしょっ!?

しかも怪物相手にあんな力使えるなんて

怪しすぎるわよ!」

宥めようとする一花を通り過ぎ、戦兎に近づく二乃。

「アンタ、まさか怪物の仲間じゃないの?」

「っ!」

突きつける一言。

「ちよ、ちよつと二乃っ。それは言い過ぎっ。」

「:確かに、二乃の言う事には一理あります。」

「五月までっ:!!」

黙っていた五月も加わり状況は更に険悪なムードになる。

さすがの三玖も止めに入ろうと一歩前へ出るが

視界に入った戦兎の顔に立ち止まる。

何故なら言わせてやれと言わんばかりに

戦兎は深刻な顔をし、首を小さく振っていたのだ。

同時に見ていた一花も黙り込む。

「記憶喪失なら自分が何者かも分からないのでは仕方ありませんが、
今日日本はあの出来事を

引き金に経済も儘ならない不安定な状況です。」

五月はいったん区切るとスカイウォールを見遣る。

「:近頃東都に現れたスマッシュと呼ばれる怪物に

いつ襲われるか分からない私達は怯えながら生活を

送るようになりました。

:はつきり言つて貴方は信用できません。」

再び区切ると、五月は戦兎の顔を見る。

いつの間にか言い始めの二乃もどこか嬉し気な様子で

戦兎を見ていた。

「ま、そうゆうことだから、とつとと荷物をまとめて出t」

「なので、これからも行く宛がないのなら

しばらくは居ても構いません。」

「「えっ?」」

二乃の言葉を押し退けるよう五月の言葉にこの場の誰もが耳を疑った。

「・貴方は特別な力を持つていらっしやいます。あの怪物と戦える力。使い方を間違えればそれは狂気にもなり得ます。」

「なら…!」

「二乃。私達は一度桐生さんに命を救われた。

違いますか?」

「!…覚えてるわよ…。」

「桐生さんの以前の記憶が、あの怪物と同類であれば、今頃私達も殺されているはずです。

ですが、私達を助けてくれた人が奴らの仲間でしょうか?」

二乃は下唇を噛み、黙り込む。

そう、戦兔は当時スマッシュに襲われた二乃と五月を救った事がある。それがきっかけで

中野家に住まわせてもらってるのが理由の1つだ。

「・なら何で私の言う事に一理あるって言ったのよ!」

「二乃、これは悪魔で私の推測です。

共に一つ屋根の下で生活して、その様な行動を

見せた事はないので、一応は信頼しているつもりです。」

「五月…。」

「・そうだよ、二乃。もし桐生君が悪い人なら

五月の言う通り今頃私達どうなっていたと思う?」

ほっと撫で下ろす三玖。一花も安心した顔で

俯向く二乃に声を掛ける。

「二乃、戦兔は変な人だけど悪い人じゃない。

五月も二乃も、私も、戦兔に助けられた。」

「…。」

「…二乃。」

三玖の言葉に眉間にしわを寄せていた二乃の表情は徐々に緩めていく。

「…ふんっ！いつか本性が出るわ！」

私は絶対認めないから！絶対対！認めないから！」

「え、あ、はい。」

と、言い残し、頭から煙をプスンと出して（そう見える）先に帰って行った。

「…ふうっ。もー、五月く。」

怖いムードださないでよっつ。」

「一花。二乃が言い出した事…。」

五月は、どちらかと言うとフォローしてくれている。」

「…。五月。」

「勘違いしないでください。」

感謝する戦兔だが、五月の表情は変わっておらず戦兔の顔を見ずに背を向ける。

「一緒に住む事については何も言いません。」

ただ、私は貴方を監視するつもりです。

それだけは忘れないでください。

二乃、一花。先に帰りますね。」

「あつ、ちよつと待ってよ五月くっ。」

五月はそれを言い残し、一花は追いかける様に

2人は先に帰って行った。

「…戦兔。その、あんまり気にしたらダメだよ…。」

「…。」

残った三玖は先程から殆ど喋っていない戦兔に声を掛ける。

フォローしてくれたとは故、あの冷たい視線は

ずっと戦兔に向けたままだったのだ。無理もない。

…が。

「…最高だな。」

「えっ？」

「五月があんな事を言ってくれるなんてな。

少しは俺の天才物理学者の才能を認めてくれたって事だろ？
なら、この調子で人々を守って、」

戦兎は区切るとポケットからラビットフルボトルを取り出し、三玖を見遣る。

「仮面ライダー^のビルド^カで、お前達五人も、絶対守ってみせる。」

「…!!」

強い眼差し。

それは本当に実現してくれそうな眼差し。

三玖は強く受け止め、手を胸に当てる。

「(あれ：?)」

胸に当てると僅かに鼓動が速くなっている事に気付く三玖。
それが何なのか、今はまだ知る由もなかった。

—————

次回！仮面ライダービルド×五等分の花嫁
〜五等分のベストマッチ〜

「何でお前がっ?」

帰宅した戦兎、そこには何故か風太郎が?

『実験は良好だ。』

動き出す影。彼らは一体…。

「ベストマッチ?!?キター!!」
新たななるベストマッチ!

「勉強するのも、案外楽しいぞ。」

「私、実は：。」

悩む三玖。その理由は：。

第三話 実験と戦国ランナウェイ

第3話実験と戦国ランナウェイ

初日の旭高校の授業が終わり、

1人鼻歌を唄いながら帰る中野四葉。

ふと、夕焼けの空を四葉は眺める。

だけどそれも一瞬。夕焼けの美しさよりも

あの聳え立つスカイウォールの方へと無意識に

視界に入る。四葉は思い見るような眼差しで

スカイウォールを眺める。

数十秒程で見終わると軽快な歩みで

四葉は自宅のマンションの中へと入って行った。

――

「たっだいま〜!っとうわあっ!?!」

「うおっ!?!お前・確か。よ、四葉だったかっ?」

中野姉妹家であるマンションの玄関に元気よく帰ってきた

四葉は先にいた男、上杉風太郎に驚き腰を

抜かし掛ける。

「何でここに上杉さんがっ!?!はっ!?!」

まさか上杉さんもこのマンションに!

四葉部屋を間違えましたか!?!」

「ち、違うー!?!ここはお前の家だっ。」

「えっ?」

風太郎の言葉に我に帰った四葉はキョロキョロと

見渡し、自身の家の中だと把握すると

ポンっと手の平に握り手を乗せる。

「確かにここは私の家ですねっ!」

四葉勘違いしていました!」

「今更かよ…。」

「でも、何で上杉さんが私の家に？」

「あ、ああ。実はな…。」

バアアアンツツ!!

「うおあ!!？」

瞬間、部屋の奥から爆発音が聞こえた。同時に

風太郎は普段考えられない様な声を上げる。

「な、何だっ?!爆発っ?」

「あー、あれはいつものやつですね。」

上杉さんも見てみます?」

先程の爆発音に聞き慣れているのか

頭のリボンのみが反応し、後は微動打にしていなかったのだ。

警戒する事もなく四葉は風太郎を招き入れ

リビングを通り過ぎ、吹き抜け式の階段を登り、

5つある扉の1番奥の本棚へと風太郎を案内する。

「…おい?何故本棚の目の前で止まる?」

「ふっふっふ!驚かないでくださいね上杉さん!」

四葉はそう言うと、本棚の一冊の本を取り出そうとした。

が、その本は取り出せず、『カチツ』とスイッチの様な

音が聞こえると、…何という事でしょう。

本棚のロックが解除され、それは扉となり開かれたのだ。

「な、なにいいいっ!!？」

無論風太郎は当然驚愕する。

「えっへへえ!どうですか!凄いですよねっ!」

「なっ?!まさか高級なマンションは

こんな隠し扉とかが備わっているのか!？」

(市民には到底及ばない世界が広がっているのか…!!)」

「いえいえっ!これは作っただんです!」

「あり得ない!テスト0点のお前が!？」

「ち、違いますよ！私にこんな作れませんよ！
作った人はこの中にいますので！

さっ、着いてきてくださいっ。」

四葉はやや中腰になりながら本棚の扉の向こうへと入っていく。その間、風太郎は脳内が困惑していた。

ここが中野五姉妹が住んでいるという

事情は既に織り込み済みで五姉妹の誰かが

こんな隠し扉を作った何てあり得もしない、と

風太郎の中ではそう思い込んでいた。

もし誰かが作ったのならば、

それだけ頭が良い事に間違いない。

つまり風太郎がここに来る理由がないからだ。

いや、だからこそ。

この先の部屋にいる人物に会いたくなる。

一体、五姉妹の内の誰が、こんな物を作ったのか。

若干興味心が湧く風太郎は、身構えつつも

四葉に続き中へと入って行った。

☆☆☆

「うわっ…何だこ…。」

先程のリビングとは打って変わってガレージの様な造形でそこは男心を撥ぐる様な部屋が広がっていた。

「桐生さーん！ボトル出来たんですかー？」

「え？桐生？」

吹き抜け式の手摺に捕まり下を見下ろし呼ぶ四葉の言葉に反応する風太郎。四葉と一緒に下を見下ろすと間違いなく、そこに居たのは桐生戦兎だった。

「完成したぞー！ゴリラフルボトル！パワー系のボトルか！

あー早く試したいっ！やっぱり俺の発明品は最高だな！

もつと世間に評価されてもいいはずなのにつ。

：つて、何だ四葉帰つて：たのか：？」

気分上昇の戦兎は感情に浸り、遅れて四葉の存在に
気付き上を見上げると徐々に言葉を失い

隣にいる風太郎の存在に気付くと言葉を徐々に失う。

「桐生っ？」

「え？上杉？」

「何でお前がっ？」

「あれ？もしかしてお二人共お知り合いですか？」

「え？あ、ああ。ちよつとした顔馴染みだ。

てか、桐生。何でここにいるんだ？」

「何つてここに住んでいるからだよ。」

「ちよつと待て。待つてくれ。情報が追いつかない。」

何気ない戦兎の衝撃な一言に脳がパンクしたのか

風太郎は頭を抱えて考え込んでしまう。

「・とりあえず下に降りてきな。コーヒーくらいなら出すぞ。」

「あ、ああ。」

☆☆☆

薄暗く、仄かに明るい照明灯の中、

怯え、悶え、苦しむ様な人間の悲鳴が

不協和音になつて響き渡る。

機材が多く並び、壁のあちこちには巨大なガラス瓶が
配置されており、中の液体が怪しげに沸騰していた。

見渡す限りどこかの研究室のようだ。

そこにいるのは白の防護服を身にまとい、

ガスマスクを着装している研究員らしき者が数名。

役割分担をして各自何かしらの研究を行なっている様だ。

「頼む！見逃してくれ！死にたくねえっ!!」

「嫌だああ!!家に帰らせてくれええ!!」

ベツトに拘束され悲鳴を上げる人々。

だがガスマスクの連中は振り向きもせず

黙々と動き回っている。

すると、奥から足音を立て、こちらに向かってくる

人影が見えてきた。

否、それは人ではなく人の格好をした“怪人”だ。

黒のデザインで覆われ身体の一部には“配管”を

思わせるようなデザインが施されており、

一見すると眼のように見える蝙蝠型のゴーグル状の部分をよく見

ると、その下に本当の目が隠れていることが確認できる。

どことなくモチーフも“蝙蝠”のような

意匠をされている。

「“ナイトローグ”様。“スチームブレード”の性能は如何でしょう

？」

『…実に素晴らしい。』

これがあれば直接“ガス”を投与でき、その場で

“スマッシュ”へと変貌させることができる。

全く恐ろしい代物を作ったものだ。』

一人の研究員が声を掛ける。

加工されているのか濁ったノイズがかかった声で

手に持つ武器“スチームブレード”を見ては淡々と喋る。

「お気に召されて何よりです。“あの方”も

さぞ喜ばれる事でしょう。」

『無論。実験は良好だ。』

奴にももつと活躍してもらわねばな。

“アレ”を送り込みたまえ。』

「よろしいのですか？“アレ”は

まだ東都も開発途中の代物です。
もし政府や民間人に見られたら世間は
大事になりかねません。」

『構わない。戦闘データが必要なのだよ。
私から“会長”に話をつけておく。』

それに、民間人の目の届かない場所で

“作動”させれば問題はない。』

「かしこまりました。」

研究員は深々とお辞儀をし、
ナイトローグと呼ばれる人物は

研究室の奥にある階段をゆっくり登っていく。

その一番上には悪趣味な造形と素材でできた

一人掛けのソファアールがあり、そこへ腰を降ろし

胡座をかいて研究室全体を見下すかのように座った。

☆☆☆

「…そう言う事か。で、桐生はここに居候してるってわけだろ？」

「責めて保護されてるって事にしといてくれ。」

一方で戦兎と風太郎、そして四葉は部屋で

戦兎の過去を風太郎に説明する。

中野五姉妹ではなく戦兎がこの部屋を作ったとなれば

風太郎もやや驚きだが納得し、

辺りを見渡しながら小さく頷いていた。

そして風太郎の手にはゴリラフルボトルが握られており、

それを見つめると軽く数回ほど投げる。

「スマッシュを倒して、成分を抜き取り、

あの浄化装置ってやつでビルドに使えるボトルに変換。

やっぱりお前すげーな。あんなもん作れるなんて学生レベル超えてる。」

「当然でしょっ！天才物理学者の桐生戦兔に不可能と言う文字はないからねっ！

分かってくれるかい上杉君！」

「今更君付けやめろ気持ち悪い。…となると、

俺ここに来る必要ないんじゃないか？参ったな。」

「…？そう言えば、何で上杉がここにいるんだ？」

「あ、それ四葉も気になってました！」

声が段々小さくなりその言葉にも気になった

戦兔は問いかける。

離れた所で機材をつついてた四葉も反応していた。

「あー、実はな。俺ここで家庭教師を

する事になったんだ。」

「え？」

「家庭教師ですか!?!凄いですね上杉さん！」

「何言ってるんだ四葉。ここであつて事は

お前等の事だろ？勉強するの。」

「え？そうなんですか？」

理解が出来てない四葉の頭からはなマークが浮かび上がる。

「桐生は察しが早いな。」

「まあこいつ等が頭悪いのは一緒に暮らして

何となく分かる。でも何で家庭教師なんだ？

「上杉、お前高校生だろ？」

「ああ。食堂の時途中で抜けただろ。」

あの時妹から家庭教師のバイトがあると連絡が来たんだ。

勉強教えられる程頭が良ければ年齢は問わないらしく、

早速今日面接の電話を掛けたら、この家の五姉妹の

父親が出たんだ。」

区切ると風太郎は用意されたコーヒーを啜る。

食堂の件は確かにあの後風太郎は食べ終え

自身の携帯の着信音が鳴り、あの場を離れたが
戦兎は納得したのか目を逸らし相槌を軽くする。
そして風太郎が言いかけた瞬間、

四葉は「はっ！」と言つて腰掛けてた椅子から
立ち上がる。

「あーなるほど！それで上杉さんは許可をもらつて
家庭教師のバイトで私達の家に来てるわけなんですね！」
四葉は納得の行く顔を見せ、風太郎を見遣る。

「おお、馬鹿の四葉でも察せれる時があるんだな。」

「えっへへえ。ありがとうございます！」

「馬鹿にされたのにお礼言っちゃったよこいつ。」

・桐生。 お前ぐらい頭が良いのならこいつ等に
勉強教えないのか？」

「逆に、天才的な俺の考えにこいつらが
ついて来れるわけない。いくら科学の説明しても
無視か寝るかツッコまれるか頭に入らない。

もし俺が家庭教師をやるとしても、お手上げだな。」

「・そんなにこいつ、こいつ等頭悪いのか？」

「む、上杉さんちよつと失礼じゃないですか？」

「今知る限りこいつ、五姉妹は相当頭が悪い。」

「むむっ！桐生さんも失礼じゃないですかーっ。

さつきからこいつこいつって！」

「二事実だ。」

「うあー！四葉傷つきますー！」

四葉は余程衝撃を受けたらしく両手で頭を押しさえ出す。

「・それで、ここに来たつてことは四葉以外の奴らには
承諾してくれたのか？」

「ま、まあ、俺にかかれれば皆んなウェルカムだったぞ！」

HA HA HA HAっ！」

「はい駄目だったのね。」

冷や汗で作り笑いのぎこちない表情を見れば
どうなったのか大体見当はつく。
戦兎でさえも毛嫌いされているくらいだから
今日初めて会った風太郎が打ち解けるはずがない。
大方家に入れた方がいいが塩対応され玄関先で
放置されてたのだろう。

「…だが諦めるわけには行かない。
俺にも目的があつてここに来た。誰が何と言おうと
あいつ等に意地でも勉強を教える使命がある！
俺が直々勉強見てやるのを拒みやがったんだ。
個人的にムカつくから俺があいつ等に制裁を下す！」
「意外と心が捻くれてるんだな。」
意外と人見知りで他人には興味がないと思っていたが
どこか熱い表情を見せる風太郎に
思わず笑ってしまう戦兎。

「…目的は何か知らねえけど、
そういう心意気嫌いじゃない。
俺も出来るだけ協力してやるよ。」

「おおっ！本当か!?マジで助かる！」
「うああ、そんな揺さぶるんじゃないよ。」
ガシツと風太郎は戦兎の両手を掴み大きく振り
戦兎は身体を揺さぶられる。

戦兎も初めて中野家に居候する事になった際に
五月と二乃に父親に報告したのだ。

だが父親は、普通なら断る筈を、
事情を聞くとすんなり許可を出したらしく
落ち着くまでしばらくは居ても構わないと認めたのだ。
女子5人しか住んでいないマンション。
そこに男子が入り込むのは言語道断。
決して世間では認められるわけがない。

無論最初は居づらく、特に五月、二乃の2人には

害虫が入ってきたかのように嫌われていたが、
時が経ち、五月には少し認められるようになっていた。
でなければあの下校中にフオローをしてくれるはずがない。
徐々に認められ、今やつと少しは
住み心地やすい環境になっている。
だから風太郎も五姉妹と上手く馴染めば
戦兎みたく徐々に通じ合おうと戦兎は思い、
風太郎と握手を交わした。

「なら早速勉強教えてあげないとな。」

どうせ自己紹介とかもしてないんだろ？」

「あーはいはいー！じゃあ私が案内するので

上杉さんはいいてきてください！

大丈夫です！最初は皆さん人見知りなだけです！

呼び掛ければきつと応えてくれるはず！」

「本当かよ？」

「はいっ！」

「…だそうだ。行動に移さないと何も始まらないぞ。

ほら行った行った。」

「なっ、桐生は来ないのか？」

「出来るだけ協力はする。が、今は実験で忙しいんだよ。

早くお前からとった新作のゴリラちゃんを

試したくてしようがないのよっ。」

「ゴリラちゃんって…。てか何で

俺から取れた成分がゴリラのボトルなんだ？」

（俺がゴリラが好きってのと同関係あるのか…？）

「スマッシュから抜き取った成分は有機物の

成分がとれるんだよ。

お前のはたまたまゴリラの成分がとれた。因みに

そのスマッシュの成分をちよつと改良して

別のボトル、無機物のボトルが

俺が作ったあの自動ボトル浄化変換装置で作れる。

凄いでしょ？最高でしょっ？天才でしょ!?

：はい、そう言う事なんで、頑張つて〜。」

「いやどういふことだよっ。」

そう言つて手首を振り、戦兎は作業机へ移動し

椅子に腰掛けビルドドライバーと何本かフルボトルを取り出す。

風太郎は少し溜息を吐くと、案内してくれる

四葉と共に部屋を出て行つた。

「さあて……ここからは俺の至福の時間！

あー！どれにベストマッチするんだろ!?

掃除機かな？ “ダイヤモンド” かな？

それとも “ライト” か？

くうー！迷つちやうなーー」

「戦兎。」

両手にフルボトルを持ち、はしゃぐ戦兎に声をかけたのは

自分の部屋にいたはずの中野三玖だった。

「おお三玖。あれ？上杉と四葉は？」

さつき出て行つたのに鉢合わせなかつたのか？」

「こっそり抜けてきた。今五月の部屋にいるから。

それより：。」

五月、と言うことは1番末っ子から順番に回つて

いこうとしてるのだろう。

おそらく五月の部屋に風太郎と四葉が入つた隙に

三玖は自身の部屋からこっそり抜けて戦兎の部屋に来た。

抜け目のない奴だと言わんばかりに戦兎は顔を顰めると、

三玖はスマホを取り出してこちらに画面を向ける。

「スマッシュ情報。東都エリア：A-5に出現した。」

テンションが上がっていた戦兎は深刻な表情へと変わる。

三玖は他の姉妹とは違い積極的に

戦兎のサポートをしてきている。

そんな三玖に戦兎は “スマッシュ探知機” という

アプリを作り、三玖のスマホにアップロードした。

東都でスマツシユが頻繁に目撃される事が多くなり
目撃してから駆け付けては確実に他の市民に被害が出る。
そこで、戦兔はスマツシユから出る特殊な成分を分析し、
すぐに外や街中で現れた際に探知出来る電波信号を
開発し、三玖のスマホに探知機として導入した。
勿論戦兔のビルドフォンにも導入しているが
実験やら何やらで忙しくやっており、
先に気付くのは大体三玖なのだ。

「よっしー！」

「待って戦兔。私も行く。」

「行くってお前、上杉から話聞いたんだろ？」

「勉強しないと社会じゃ生きていけねーぞ。」

「勉強はいい。それより市民の安全が大事。」

「だけどお前まだ高校生…。ったく…。ほら行くぞ。」

「うんっ。」

我儘を言う三玖に仕方なく承諾し、部屋を出る。

お前はまだ高校生。と言いたかったのだろうが

戦兔も同じ高校生がとやかく言う筋合いはない。

廊下には風太郎と四葉が居らず、そのまま

吹き抜け式の階段を降りる。

タイミングが良いのか悪いのか不明だが

風太郎と鉢合わせすることなく、戦兔と三玖は

自宅を飛び出した。

☆☆☆

時刻は夕方18時過ぎ。街から離れ、廃墟の工場付近へとマシンビルダーで走行し、目的地へと向かう戦兎と三玖。

「戦兎っ、そろそろ着きそうっ。」

「分かってるー！てか、お前勉強本当によかったのかっ？」

「さっきも言った！勉強より市民の安全が優先・！」

「そうだけど！お前等の父親何で家庭教師なんて雇ってんだっ？」

向かい風が強いためか2人はやや大きめの会話をする。

三玖はしばらく俯向くと顔を上げ戦兎に語りかける。

「…実は、私達っ。前の学校で留年になったのっ。」

「予想以上の馬鹿だったか…。」

三玖の言葉に納得がいく戦兎。

居候した最初の頃は家の事情で編入して

来たのだと思っていたが、今日風太郎が来た理由を聞いて

疑問に感じていた。

彼は頭が良ければ年齢は問わないと言っていた。

なら、余程勉強に関して切羽詰まっていると推測する。

現に、戦兎五姉妹は真面目な五月を除き、勉強を

家でしているところを見た事ないからだ。

だから、戦兎は三玖の言葉に合点がいく。

「…勉強するのも案外楽しいぞ。」

「勉強は嫌い。頭に入らない。」

「頭に入らないのは興味がないからだ。」

興味を少しでも持てば自然と頭に入る。

高校生なんだから少しでも得意な科目とかあるだろ？」

「…っ。私、実は…！」

何かを言いかけたその時、バイクのブレーキがかかり、

三玖は戦兎の背中に身を任せる。

どうやら話をしている間に目的地へと到着したようだ。

お互いヘルメットを取ると目の前に見えるのは

使われていない廃工場だ。

持ってきたライトで灯りを照らす戦兎。

夕暮れの時間帯なので廃工場は薄暗く、
不気味な雰囲気を出す。

「本当に、ここなの…?」

「探知機が強い信号を出している間違いない。

何だ?もしかして怖いのか?」

「…違う。武者震い。」

「お前は戦わないでしょーよ。」

ツツコミを入れながら、戦兎は廃工場へと近付き、

扉に手を掛けようとした次の瞬間だった。

突然、グシャ!と大きな鈍い音が

戦兎と三玖の背後から響く。

「うおっ!」

「きゃっ!」

一瞬何が起きたのか分からず、2人は驚き、

戦兎は灯りを背後へと向ける。

「えっ?戦兎これ…!」

「…!何で…どこから…!」

2人は目の前の物体に驚愕する。

それは紛れもないスマツシユだった。

両手は巨大な翼の様な形をした造形、恐らく

飛行能力が備わっているスマツシユだろう。

よく見るとスマツシユの身体のあちこちに

何か打ち込まれたような穴がいくつも空いていて、

身体からは煙があちこちから上がっており

悶え苦しむ様な声をあげて横たわっている。

つまり、今鈍い音がしたのは、空中から落ちてきたと推測する。

「これ、もう弱ってる…?」

「ああ。少なくとも一般人の作業じゃねえな…。」

戦兎はダメージを受けている「フライングスマツシユ」を見て

ポケットからエンプティボトルを手に取る。

シールドディングキャップを正面に固定し、

ボトルのキャップ部をスマッシュへ向け、成分を抜き取る。
粒子となってボトルへ吸収されると変貌していた
身体は元に戻り、女性が横たわっていた。

「大丈夫…?」

「う、うう…。」

三玖は駆け寄り女性を軽く揺さぶるとうめき声は上げるが目覚
さない。微かな意識はあるが

彼女は気を失っているようだ。

「…三玖。この人を連れて安全なところへ。」

「わかった…。戦兔は?」

「少し辺りを探ってみる。嫌な予感がする…。」

戦兔はビルドドライバーを取り出し腰に宛てがうと
アジャストバインドが腰に巻き付き固定する。

拳銃を持ってしてもスマッシュを倒せるのは不可能に近く、

戦兔は人間の仕業じゃないと判断し、変身する為、

三玖等から少し距離をとる。

辺りを警戒しながら2本のフルボトルを軽く振り

シールディングキャップを固定。

『ラビット!』

『ダイヤモンド!』

『Are you ready?』

「変身!」

ツインフルボトリスロットにフルボトルを差し込み
ボルテックレバーを回すと、アップテンポ調の
音楽が鳴り、赤と水色の液体が流れる
スナップライドビルダーを展開。

状況が状況なのでファイティングポーズを取らず

戦兔は仮面ライダービルド

トリアルフォーム（ラビットダイヤモンド）に
変身が完了する。

ビルドは直様仮面の額にある

“BLDシグナル”を作動させる。

これは戦闘データ、周囲の状況及び、

ビルド全身の状態を分析し把握できる事が可能のシステム。
つまりデータ収集装置だ。

「っ！やっぱ…！」

「戦兔？」

ビルドは分析を終えるとドライバーから瞬時に
小型のパイプが伸び形を形成。

完成されるとそれは武器になり、ビルドは手に持つ。

ビルドの愛用の武器、刃はドリルの造形がされている。

その名も“ドリルクラッシュャー”。

「三玖っ、伏せてろっ。」

「う、うんっ！」

状況が分からない三玖は言われた通り、

倒れている女性に上半身だけ被さる様に伏せる。

ビルドは確認すると、左腕を大きく三玖、そして

自分事囲む様に円を描く。左半身、

“ダイヤモンドハーフボデイ”が光り輝くと

ダイヤモンドの形をした防壁がビルド等を

囲むように完成する。

その瞬間、四方八方から防壁の外側が強い衝撃と音で

火花を散らして行く。

「きゃあっ!?!な、なにっ!?!」

「ぐっ！その女性を襲った連中に囲まれてる！」

「嘘っ…!?!」

防壁で覆われ更には外部からの攻撃で確認すら

出来ない状況だが、ビルドは把握しており、

ドリルクラツシャーのドリルの部分を取り外し
逆さにして別のジョイントへと差し込む。

「ブレードモード」から「ガンモード」へ変形！

2モード変形ができるのはヒーロー武器の特権でしょっ！」

「こんな時に呑気すぎ…っ！」

こんな状況でもビルドは独り言解説をしてしまい
流星の三玖も声を上げてツツコミを入れる。

ビルドはゴリラフルボトルを取り出すと

ドリルクラツシャーのソケットに装填する。

『Ready Go!』

「三玖！そのまま伏せてろ！」

ドリルクラツシャーから音声が鳴ると

ビルドはダイヤモンドの防壁を解除すると同時に
トリガーを引く。

『ボルテックブレイク！』

「はあっ！」

ビルドは立ち上がると横風に

ドリルクラツシャーを大きく振り払う。

それを追っかける様に巨大な拳状のエネルギーが
周りの何かに当たったのか、ビルド等の

周囲で爆発が起きる。

「た、倒したの…？」

「いや、まだだ。」

ホッと一息を入れる三玖だがビルドは警戒を解かず
その視線の先を逸らす事なく見ていた。

場に緊張感が走る。

戦いが終わってない事に気付く三玖は
ビルドの見る方角を見遣るが、
いつの間にか日が沈み、辺り一体は夜の
薄暗い景色が広がっていた。

『Ready Go!』

ビルドはドリルクラッシャーにライトフルボトルを
ソケット部、フルボトルスロットへと装填。
ビルドは思い切り腕を伸ばしその銃口を真上へと向けた。

『ボルテックブレイク!』

音声と共に黄色いエネルギー状の銃弾が放たれる。
それはまるで、打ち上げ花火の様な形と速度で
空高く上がり：
それは弾け飛び、辺り一面が明るく照らされた。

「…うそ。」

「…まるで映画の光景だな。」

三玖、そこから一步も動くなよ。」

ビルドは構える。2人が見据えたその先には
その数は約30と推測する。

行進を行う軍隊がこちらに向かってくる。

全身灰色の装甲で覆われており、その手には
銃口の下にはナイフが取り付けられた

ライフルを所持している。

「凄い数…!」

『〃仮面ライダービルド〃ヲ確認。対処ヲ破壊シマス。』

「…どうやら人間じゃねえみたいだな。」

行進が止まり一体の個体がビルドを分析し

AIが解説するような言語で喋る。

スマッシュでもなく人間でもない戦闘集団にビルドは躊躇なくドリルクラッシャーの銃口を向ける。が、その集団の二列目、三列目と順番に、急に背中を向け始めた。

「ちよ、え？何だっ？」

個体は一つ一つ積み重なるとその個体の身体は変形し徐々に合体していく。そして一体の巨大な二足歩行のロボットへと変形合体したのだ。

「うそーん!？」

「でかい・!？」

身長7メートルくらいはあるその巨体に驚愕。

ビルドはドリルクラッシャーをガンモードからブレードモードに切り替えると、左足に力を入れ腰を低くする。

「三玖っ。俺がこいつを引き付けておくから

何とかその女性を安全な所へ連れて行ってくれ！」

三玖の返事を待つ事なく、ビルドは一気に跳躍し、

巨大ロボの頭部らしき部分に着地。

ドリルクラッシャーで突き刺さすと巨大ロボの頭部から火花が散り、ビルドを振り払おうと

その巨体を大きく揺らす。

「うおっとな!？」

『ーッ!!』

耐えきれずビルドは三玖等がいる別の方向へと

振り落とされ豪快に転んでしまう。

だが好都合。巨大ロボはビルドを攻撃せんとばかりに機械音の様な咆哮と共にビルドに向かって歩き出す。

「いつてえ。ちよつと骨が折れる戦いになりそうだな。」

ビルドは尻の埃を払いながら立ち上がる。

そしてドリルクラッシャーを構え、

向かってくる巨大ロボを見ながらばやく。

一方で三玖は女性の両脇に腕を入れ引きずる状態で息切れをしながら女性を運び終えると

ふと、廃工場の隣にある貯水タンクが目が入る。

「……」

何か思いついたのか三玖は深呼吸をし、

大きく息を吸うと…。

「戦兔ーっ!!」

「っ?!三玖かっ?!」

巨大ロボの攻撃にドリルクラッシュャーで受け流すビルド。

少し離れた所にいる三玖が声をあげ反応する。

いつもクールで小声な三玖の大声に多少驚いてしまう。

「そのロボットを、工場に誘い込んでっ!!」

「備中高松城の戦い」の策っ!」

「はあっ?!備中高松城っ?!」

ビルドは攻撃を交わしながら叫ぶと三玖は大きく頷く。

「急に!歴史をぶっ込んでくんじゃ!ないよっ!

えっと確か豊臣秀吉が提案した水攻めの…!」

そう言う事かっ!」

ビルドは廃工場に視線を向ける。その近くには

巨大な貯水タンクが設置されているのを発見すると

BLDシグナルを作動させ分析を始める。

「貯水タンクアレを壊す。パワーが必要だな。」

さあ、実験を始めようかっ!」

ビルドは巨大ロボから距離を取ると

ゴリラフルボトルを取り出し、2、3回振り、

シールディングキャップをボトルの正面に固定。

『ゴリラ!』

『ダイヤモンド!』

『ベストマッチ!』

「ベストマッチ?!キター!!っふう!!」

偶然装填されていたダイヤモンドとベストマッチしビルドこと戦兎は感情が昂りボルテックレバーを勢いよく回す。

スナップライドビルダーが展開し茶色と水色の液体が流れ新たなアーマーが形成される。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『輝きのデストロイヤー!ゴリラモンド!イエイ!』

アーマーが挟む様に着装され蒸気が勢いよく射出される。ラビットタンクとは異なる音声がドライバーから流れ剛腕の拳、片側は煌めく宝石のボディ。

パワーとガード、つまりは矛と盾を兼ね備えた

ビルドは“ゴリラモンドフォーム”へと変身する。

「勝利の法則は決まった!」

台詞を決めるとビルドは置いてあつた

マシンビルダーに跨り、アクセルを全開に回し走行。

巨大ロボはそれを追いかけると前進し始める。

廃工場の中へと突っ切ると勢いよくブレーキターンをし、その場で一時止まり巨大ロボが来るのを見届ける。

『oooooooo!!』

「っ!いまだ!」

当然その巨体は廃工場の扉事破壊し突入する。

ビルドを踏み潰そうと脚を上げるその瞬間、

アクセルターンを決め、その脚をくぐり抜けたのだ。

『oooooooo!!』

「こんな狭いところでその巨体はキツいだろ?」

巨大ロボは振り返り後を追いかけてようとするがその巨体故に廃工場の天井や物に当たり

動きが鈍っていた。

その隙に、ビルドは貯水タンク付近でマシンビルダーから降りると貯水タンクに向かって右腕の拳に力を入れ、

「はあっ！」

ー叩き込んだ

貯水タンクは大きく凹み巨大ロボへとゆっくりと倒れ、大量の水が巨大ロボに覆い被さる。

「流石に構造剥き出し状態で真水を浴びたら

ショートするだろ？」

バチバチと火花を散らし動きが鈍る巨大ロボ。

廃工場の中は水でほぼ浸水状態となる。

「さて、改めてもう一度。んんっ。

勝利の法則は決まった！」

『Ready Go!』

ボルテックレバーを回したビルドは

腐食している鉄柱に左手を触れた瞬間、

瞬く間に鉄柱はダイヤモンドの宝石に包まれていった。

今度は左腕の拳を力強く引き絞るとその拳に

螺旋状のエネルギーが凝縮されていき、

「はああっ!!」

『ボルテックファイニッシュ！』

宝石に変わった鉄柱を解放された衝撃をぶつけ

砕け散ったダイヤモンドを巨大ロボに百発百中の如く命中。

そして爆発し破壊したのだった。

「…はあく。疲れた…。」

「ビルドは肩の力を抜き、ドライバーからボトルを抜き取り、アーマーは粒子となつて消え、変身を解除する。そして、巨大ロボが爆発した残火を見遣る。」

「……何か裏がありそうだな。」

見た事のない敵、集団で行動しライフルを所持している様はまさに“軍”、兵隊そのものと言えるだろう。近頃のスマッシュ出現率が増加しているのと何か関係があるのかもしれない。

そう戦兔は考え、廃工場を後にしたのだった。

次回！仮面ライダービルド×五等分の花嫁
〜五等分のベストマッチ〜

「初めまして！お兄ちゃんがいつもお世話になってます！」
風太郎に妹？可愛さに戸惑う戦兔。

「この新武器にベストマッチするボトルを
見つけなければならぬ！」
戦兔は新武器開発！ベストマッチなボトルとは？

「桐生っ！こいつら……！」
「ああ……ある意味凄い才を持っているぞ……！」
風太郎と戦兔は一枚の紙を見て驚愕。

「調べてみる必要があるな。」
戦兔はある決断をする。それは……

第4話問題だらけなシスターズ